

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

あいさつ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009834

あいさつ

国立民族学博物館（みんぱく）は文化人類学・民族学とその関連分野の大学共同利用機関として1974年に創立され、1977年に開館しました。みんぱくには現在専任教員が52名在籍し、それぞれが世界各地をフィールドに調査・研究活動に従事しています。人類学関係の単体の教育研究機関として、世界全域をカバーする研究者の陣容と研究組織をもつという点で、みんぱくは世界で唯一の存在といえます。

一方で、みんぱくがこれまでに収集してきた標本資料は、現在、34万5千点を超えます。これは、20世紀後半以降に築かれた民族誌資料のコレクションとしては世界最大のもので、また、博物館施設の規模の上で、みんぱくは、世界最大の民族学博物館となっています。

文化人類学分野の国際的中核研究拠点として、みんぱくはこれまでに海外25大学・博物館、国内16大学・研究機関等と学術協定を締結し、機関間の共同研究、研究集会や連携展示等の活動を展開してきています。本年度は、新型コロナウイルス感染症の地球規模での拡大により、海外での調査研究は事実上全面的に断念せざるをえなくなり、対面での研究会・シンポジウム活動も大きな制約を受けましたが、オンライン環境の整備により、新領域研究の開拓をめざす国際共同研究プロジェクト「特別研究」を4件、公募制・異分野融合に基づく共同研究を27件実施しました。また、国際シンポジウム・ワークショップを15回開催しています。これらの研究集会への参加者、及び外国人教員や客員教員、外来研究員など本館を活用する国内外の研究者はオンラインでの参加者も含めて1,206人にのぼります。

これら共同研究やシンポジウムの成果は、日本語・外国語の刊行物によって国内外に発信しています。さらに、昨年度に続き、世界の文化や芸術に関する映像番組や音声資料をそのまま論文と同様に掲載できる国際マルチメディア・オンラインジャーナル『TRAJECTORIA』Vol. 2を刊行しました。

研究資料の国際的集積・発信拠点として、みんぱくでは、現在、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」というプロジェクトを推進しています。このプロジェクトは、国内外の大学・博物館のみならず、研究対象となる社会（ソースコミュニティ）との協働の作業に基づいて、本館所蔵の標本資料・映像音響資料を中心とした人類の文化資源に関する情報を蓄積し、その国際的な発信、交換、生成、共有化と世代を超えた継承を目指すものです。コロナ禍のもとでも、プロジェクトは順調に進展しています。

博物館機能を活かした大学や社会への貢献に関しては、展示をはじめとする多様なメディアを用いて最新の研究成果を発信しています。2020年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大にともなう緊急事態宣言の発出を受け、博物館は、2020年2月28日から6月16日まで臨時休館を余儀なくされましたが、年度を通じて、特別展、企画展、巡回展等は、計6回開催しました。また、新型コロナウイルス感染予防対策をとったうえで、館内外でのゼミナール、研究公演、映画会等の事業を、オンラインも併用しつつ積極的に実施しました。2019年度に更新した次世代型電子ガイドについては、操作性や位置情報精度の向上を図っています。さらに、講堂のみんぱくインテリジェントホールとしての整備が完了しました。

新型コロナウイルス感染症の収束は、まだ見通せません。感染症の蔓延が地球規模で、しかもほぼ同時に生起するという事態に及んで、社会の成り立ちそのものが問い直されるとともに、社会に潜在していた差別意識の浮上による世界の分断も生じています。異なる文化を尊重しつつ、言語や文化の別を超えて共に生きる世界を築きあげる上で、本館の果たすべき役割は今後ますます重要になると認識しております。

『研究年報』は、以上のような、みんぱくの教員の研究調査をはじめとする多方面の活動とその成果について、みなさまに知っていただくために毎年刊行してまいりました。大学共同利用機関としてのみんぱくの一年間の活動を集約してお伝えするものです。

本誌を通じ、みんぱくの活動をご理解いただき、今後とも、本館に対して、みなさまからのご指導とご支援をいただけますことを念願しております。

2021年3月
国立民族学博物館長
吉田 憲 司

